
恋姫無双～龍の如く～

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜龍の如く〜

【Nコード】

N5641Y

【作者名】

bigboos

【あらすじ】

ある日暴走車に引かれて死んでしまった鬼龍和人、目の前に爺さんが立っていて二つの選択を言われた、ここに残るか・異世界に行ってやり直すかと言われた。この話はぬらりひよんの孫×デビルメイクライ×恋姫無双・・などまあ、チートを使っています

初めて書くので恋姫無双などに関して「知ったかぶってんじゃねーよ」とか思う人がいると思いますが許して下さい

第一幕 俺は・・・(前書き)

どうもbigboosです初めまして、
いやゝ書くのは初めてなの
で応援よろしく
お願いします

「本当ならお主はあそこで死ぬはずはなかった、じゃがお主が死んだ時

本来なら輪廻の輪に戻るはずだったんじゃが、なぜか輪廻の輪から外れてしまったんじゃ（笑）」

なんでアンタ笑ってんだよ？（怒）

「まあそれはとにかく、この後お主はどうしたいんじゃ？このままここにいますか？

それとも、異世界に行ってやり直すか？お主の好きな方を選ぶんじや。」

え・・・それはここに残るのはさすがに嫌だけど、向こうの異世界に行ったら赤ん坊からやり直しなのか？ていうか異世界ってどんな世界なんだ？それによって決まるけど・・・

「ん？その世界は・・・ま行っただけのお楽しみじゃ」

うーん、どうしよう・・・

俺なりに考えたすえ、結局ここにいるのは暇だと思ったので・・・

爺さん、俺異世界に行く

「む、そうかではさっそく・・・」

ちょっとまったー？

「うお？なんじゃいきなり、大声出しおって？」

赤ん坊からって言うのはちよつと氣にくわねえな、せめて20才にしてくれ頼む？

あと何個か願いを叶えて欲しんだ

「わがままな奴じゃな・・いいじやろ、で他になにを叶えてほしんじや？」

第一幕 俺は・・・(後書き)

途中で終わってしまいました、スイマセン次回は主人公がいろいろと

チートのような事を言います

アドバイス宜しくお願いします

第二幕 どうしようこれから

まず一つ目はデビルメイクライ3のパージルと、服装と髪型意外は全て同じで、

二つ目は外見だけどぬらりひよんの孫に出てくるので、まあなんでもいいです

四つ目は年齢は二十歳にしてくれ、赤ん坊

の頃からって言うのはあまりにも嫌だから。五つ目は、女性に多少モテル

ぐらいにしてくれ、最後はどんな傷でも治せる薬をくれ

「うーむ、まあよいじゃろ一つ目と四つ目は叶えてやろう。二つ目じゃが外見は

なんでも良いと言ったが、本当に何でもいいんじゃないかな？」

ああ・・・いいけど

「うむ、分かったあとで後悔するんじゃないぞ、よいな？」

五つ目は十人中七人が振りかえるぐらいでよからう」

まあ・・・いいけど

「最後の願いじゃが、この薬を持って行くがよいどんな傷でも治せるものじゃ。

じゃが、悪しき者には使うでないぞ、いいな？」

分かった

「それでは早速異世界に送るからの、元気でのう・・・」

「おっと忘れる事じゃったお主名はなんと申す」

俺の名前は鬼龍和人、向こうの世界では結構優しかったんだぜ？

「ふむ、鬼龍和人か・・・良い名じゃ異世界でも優しい心を持つのじやぞ。

そして、平和な世の中にするんじゃ」

そして俺は光に包まれて目の前が真っ黒になった

う・・・うーんここは・・・

目を覚ますと川に近くにいた、「ここが三国の世界か・・・

ん？何だ手紙か『鬼龍よお主がこの紙を見ているとゆうことは無事着いたようじゃな

お主がいる世界は三国の世界じゃが、ただの三国世界ではない、恋姫無双の世界じゃこの世界は

・・・とゆう感じじゃ、あと外見じゃがなんでも良いと言ったので淡島にしといたからのじゃあの』

手紙に書かれたことを理解し、立ちあがった・・・さてこれからどうしよう。

第二幕 どうしようこれから（後書き）

どうも、寒いです。今回、これからのところで終わってしまってます
イマセン

次回、鬼龍はとりあえず人に会うために歩いていると、山賊が一人
の女子を囲んでいた。鬼龍は助けようとする・・

第三幕 黒髪の女（前編）

俺はとりあえず人に会うために道を歩いていた

「ん？ あれは・・・」

よく見ると道の端っこに三人の男とその前に一人の少女がおびえていた

『へへへ、金目の者を渡しなへへへ』

『そうだぜ速く渡しな』

『は、早くわ、渡しんだな』

なんだあいつら、人の金を奪うのか、と言う事は山賊か・・
とりあえず助けるか

「おいその人」

『ああ？ なんだガキ』

ガキとは失礼な、二十歳だぞ

「その娘おびえてんだろ、離してしてやれよ」

『なんだと、部外者はどっか行けよ』

そう言いながら山賊の一人が、剣を抜いて俺にむけた

「おい、もう一度言うぞ、その娘を離してやれ」

俺はそう言いながら閻魔刀を鞘に入れたまま抜いた

『お・・・なんだやるってのか後悔すんじゃないぞ?』

ほかの二人も剣を抜いて構えた

「おい、お前らこそ後悔すんなよ?」

『し、死ぬんだな』

デブが怖そうに突っ込んでくる

はあくめんどくせ、俺はそう思いながら閻魔刀でデブのみぞおちを叩いた

『ぐふう?』

『あ、兄貴?デブがやられた?』

『な、なんだと・・・デブがやられた』

おいおい、味方のお前らまでデブって言うなよ

『っ・・・?おい次お前がいけ?』

『いやっすよく兄貴が行けばいいじゃないですか?』

なんか、二人でもめあっているな、今のうちに・・・

『ん?』

『なんだ?』

地面を蹴って、刹那の如く目にも止まらぬ速さで二人のみぞおちに、閻魔刀を入れた

『ぐふう?』

『あべしい?』

そのまま二人は気絶した、「ふう〜あ・・・大丈夫か?』

少女の所に駆け寄り声をかけると、『あ・・・ありがとう・・・』

おびえた様子でこっちを見ている。山賊じゃないですよ〜

「ああ心配して、俺は山賊じゃない」

『ほ・・・本当?』

「ああ、嘘はつかねえさ」

『・・・・・・・・』

ああ〜警戒してるねえ、ままいいかおつとそれより

「あのさ、ここ近くに村とかないか?」

『あるよ、ここをまっすぐ行ったところに・・・』

「そっか、ありがとう・・・あ君はどこに行くの? なんなら送るけど・・・」

俺がそう言うと、『私は、この先にある村に住んでる・・・』
ん? じゃあ俺と向かう所か

「じゃその村まで一緒に行こうか」

『え、でも・・・』

「いいって、また山賊が出たら危ないだろ?」

『うん・・・』

お、村が見えたぞ。

あれから数分かかってようやく村の少し手前まで来た。

よし、あと少しで・・・と思った瞬間、横からいきなり一人の女が俺に向かって槍のようなものを

刺してきた。

「うお？あぶねえ？」

少女を抱えて、少し後ろに下がる

「誰だ？」

闇魔刀を構えて俺がそう言うのと、黒くて長い髪の女が、

「わが名は関羽？字は雲長？その娘を離せ山賊め？」
と体にまもっていた布を撮り名のつた

こいつが、関羽か・・・、男だと思ってたけど、そお言えば爺さんの手紙に

恋姫無双とか書いてあったけど、って言うか俺は山賊じゃねえー

第三幕 黒髪の女（前編）（後書き）

どうも、bigboosです。今回やっと武将がでてきました
この後も楽しくしていくのでヨロシク

次回は主人公の設定を書こうとおもいます

コメント、感想お願いします

遅くなりながら、オリ主設定

主人公

鬼龍和人（二十歳）

身長…178cm

体重…75kg

体格…無駄のない体。（おもに筋肉）

容姿…心は優しい。外見はぬら孫の淡島

意外に平和主義

聖フランチェスコ学園に通っていた普通の高校生

普段は、テニスなど体を動かす事をしている

怒らせるとたとえ妖怪など、一瞬にして震えあがる

外見が淡島なので夜になると、女の姿になる。

昼は男の姿

三国志はときどきにしか、見てないのであまり詳しくない

武器

闇魔刀

デビル3に出てくるバール愛用の闇属性の日本刀。「人と魔を分かつ」とも、「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀、鬼龍が使うとパールを超える力を出す

ベオウルフ

攻撃力があり、攻撃速度も速い。

鬼龍の場合これを使うと拳が痛い

フォースエッジ

こちらは、デビル1に出てくる。ダンテが装備しており、アミュレットがそろくと魔剣スパーダになる

鬼龍はこれを危ないときや助けるときにつかう

幻影剣

魔力により出来た剣。

自分の周りや相手の周りに、設置できる。その場から直接相手に放つことができる

最大でも五人まで同時に攻撃出来る

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる。移動・回避にも役立つ

鬼神の“鬼憑”完全なる父性——“伊弉諾”イザナギ」

鬼龍が男の姿の状態で閻魔刀を装備している時に発動できる
どんな相手でも一刀両断できる、そのためには「畏」を溜めて一気に放出する

この技はぬら孫の淡島ので、魅を放ち鬼の如く恐怖に落とし入れる

天女の“鬼憑”完全なる母性——“伊弉冉”イザナミ」

鬼龍が女の姿の状態で発動できる、武器は必要なく混乱している味方に対して使用する
使用すると少し疲れる

いくさおとめえんぶ
戦乙女演武

乙女のごとく艶やかな舞で翻弄する。

これも、女の姿でしかできない。

魔人化

武器はどれでもよい、男の姿でしかできない

覚醒・魔剣士スパード

鬼龍が怒りや悲しみが頂点に達した時だけに覚醒する

武器は魔剣スパード、姿は攻撃をする時だけスパードの姿になる。

常に、周りには幻影剣が配置しており、攻撃してくる敵には容赦せず、降伏する敵には

みぞおちを入れる。

背後にはイザナギの姿が見える。（なぜか・・）

この状態の時はどんな攻撃も全く効かない。（たとえば、マグマでも、レーザーでも）

遅くなりながら、オリ主設定（後書き）

オリ主の設定は話が進むたびにたまに変わります
まあ・・あまり変わらないとおもいますが。

鬼龍は、もう最強になってると思います

次回鬼龍はいきなり出てきた関羽と戦う事に・・・

第五幕 黒髪の女と後編

愛紗

「愛紗、村はまだなのか、鈴々は疲れたのだ」

「私も疲れちゃったよ」

「桃香様すっかりしてください、鈴々もしっかりしろ？」

「うむ、私も少し疲れてしまった」

二人ともみつともない、おまけに星まで・・・

「朱里、雛里大丈夫か？」

「はい、私は大丈夫です」

「は、はい大丈夫でしゅ、はわわわ・・・噛んじゃった・・・」

二人は大丈夫のようだな

それから少しして、道ばたに三人の男が倒れていた。

「桃香様？人が倒れています？」

「え？いってみよう？」

急いで倒れている三人の男もとへ急ぐ

「大丈夫か？しっかりしろ？」

「大丈夫ですか？」

『う・・・ひい？ち、近寄るな？』

何を言っているのだこの男たちは

「落ちつけ何があったんだ？」

星がそう聞くと

『さ、山賊が、おらの娘をさらったんだ？』

「何だと？それで山賊はどっちに行ったんだ」

星がきくと、『た、確か向こうの村の方に行った気がする・・・』

「村か、分かったあなたの娘を助け出そう」

『本当か？ありがとう』

「おい、愛紗その山賊の特徴をきいとかないでいいのか？」星が言う

「あ・・・そうだった、山賊はどんな姿だ？」

『腰に黒い刀をしていて、あと・・・すまん忘れてしまった』

黒い刀か・・・この国の者じゃないそうだな

「よし、星、鈴々助けにいくぞ？」

「鈴々はつかれたのだ」

「私も疲れてしまった、少し休ませてくれ」

「まったく、じゃ二人は桃香様を守りながら後からきてくれ」

そう言い残して私は一人、腰に黒い刀をさしている山賊を探しだした

はあ、はあ、どこにいる、あれからずいぶんと絶つが黒い刀を持っている

山賊はどこにもいない。

「向こうの方を探してみるか・・・」

向こうに行く途中話し声が聞こえた。

「ん？あそこにいるのは・・・」

一人の小さな少女と腰に黒い刀をさしている男がいた

「あいつか」

そのまま山賊に向かって青龍円月刀を向けた。

「うお？あぶねえ？」

相手は少女を抱えて後ろに下がった。

「誰だ？」

男が見たこともない剣を向けて行った

「わが名は関羽字は雲長？その娘を離せ、山賊め？」

鬼龍

なんだこの女、いきなり人に槍のようなものを突き付けて、礼儀をしらねえのか

「おい、いきなり襲ってきやがって、お前も山賊か？」

「なにを言うか、お前こそ山賊だろう？」

「・・・？、なに言ってるんだよ山賊なわけねえだろ」

そう俺が言っていると、「うるさい、山賊め？覚悟ー」

ブン？ ガキイン？

俺はすかさずフォースエッジに武器を変え関羽の攻撃を防ぐ

「くう・・・？何すんだよ？話をきけよ。」

「問答無用？はあああああ？」

く・・・このままじゃ、ん？そうだ・・・

何だこの男、ただの山賊だと思っていたが違う、この男はまるで・・・

よし、いまだ。

ブン？ 残像を残しながら相手の目の前に移動する

「え・・・」

そのまま、相手の足をはらった

「きゃ？」

そのまま地面に倒れこみフォースエッジ突き刺す。

「これで「まってください？」なんだ次は」

そこには五人の女が後ろに立っていた

なんだこいつら・・・

第五幕 黒髪の女（後編）（後書き）

どうも、やっぱり戦闘のところは書くのが難しいです。
でもまあがんばります

次回、鬼龍は誤解をやっと聞き入れてもらい、五人の女の子達と村を目指す、しかしそこには鬼龍が倒した山賊三人組が待っていた。

第六幕 山賊再び（前書き）

今気がついたけど第一幕以外は全部（改）になっていた（笑）
その理由は、すべて途中で作成を終えたのでまた途中から、するこ
とに
なっただけです

第六幕 山賊再び

鬼龍

「で、その男三人達に山賊が娘をさらったって聞いて俺を襲ったのか
「申し訳ない」

頭を下げて謝る関羽

「むやみに人の言う事をきくな」

「「「「本当に申し訳ない（ごさいません？）（のだ・・・）」」」」

他の五人も一緒に謝っていた

「あ、いやそこまでしなくてもいいから、頭上げて」

「え、あはい」

「うむ」

「お兄ちゃんは優しいのだ」

「優しい方ですね」

「本当だね♪」

「や、優しい人でしゅ、噛んじゃった・・・」

そこまで言わなくても・・・と、そうだこの子をむらに連れて行かないと

「じゃあ、この子を村におくるから、なんならあんた達も一緒に来るか？」

「え、いいんですか？」

「ああ、おっと名前を聞くのわすれてたな」

第六幕 山賊再び（後書き）

どうも、まだ作成中なのでお楽しみ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641y/>

恋姫無双～龍の如く～

2011年11月22日18時50分発行